

ニューズレター

発行:水資源・環境学会

NEWS LETTER No.33

2003年4月7日

2003年度 水資源・環境学会 研究大会のご案内

2003年度研究大会を下記の要領にて開催いたしますので、
ご案内申し上げます。

研究大会テーマ：「地域社会と水環境」

今年度の研究大会は、「地域社会と水環境」をテーマに開催します。地域社会の表情は、地形、植生、動物、空そして、水という自然の造形物が織り成して創られ、千変万化しながら時とともに移りますが、人間が水との長い絆から学んだことは、人が水に思いやりをこめて接すると地域社会の表情が豊になり、おろそかにすると貧しくなる、ということでした。すでに生活や地域から遠くなって久しい水は、今や再び地域社会の表情を明るくする万能薬として見直され、人と水との新しい絆づくりが始められています。この新しい課題に取り組んでいきたいと考えています。

水資源・環境学会 研究大会事務局

目次：

| | |
|------------------------|---|
| 2003年度 研究大会ご案内 | 1 |
| 研究大会プログラム | 2 |
| 2003年度夏季 現地研究会のお知らせ | 4 |
| 2002年度 冬季研究会ご報告 | 5 |
| 2003年1月 シンポジウムご報告 | 8 |
| 新規加入会員案内 | 9 |
| 事務局からのお知らせ | 9 |

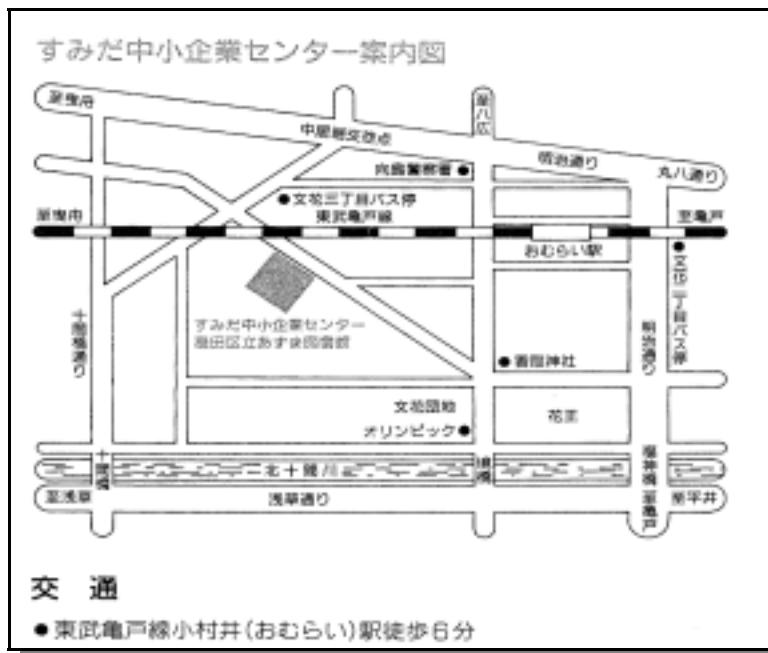
【大会会場】：すみだ中小企業センター 5階 会議室2・3

TEL：03-3617-4351 東武亀戸線「小村井駅」徒歩6分
(東京都墨田区文花1丁目19番1号)

【大会日時】：2003年6月14日(土) 9:30～10:30 受付・雨水資料館見学会

10:30～16:30 研究大会

17:00～19:00 懇親会



【研究大会プログラム】

| | | |
|-----------------|---------------------------------------|------------------|
| (9:30 ~ 10:30) | 受付・雨水資料館見学会 | |
| (10:30) | 開会 | |
| (10:30 ~ 11:30) | 記念講演 『革新的スカイウォータープロジェクト』 | 村瀬 誠 (国際雨水資源化学会) |
| (11:30 ~ 12:30) | 総会 | |
| (12:30 ~ 13:00) | 昼食 | |
| (13:00 ~ 13:40) | 基調講演 『まがりかどにきた水資源開発 - 「近い水」対「遠い水」 - 』 | 森滝健一郎 (岡山大学名誉教授) |
| (13:40 ~ 13:50) | 休憩 | |

研究発表

| | | |
|-----------------|--|--------------------|
| (13:50 ~ 14:20) | 秋田県玉川における水利と土地利用の展開 | 横山 俊一 (立正大学・研究生) |
| (14:20 ~ 14:50) | 遠州の水環境と市民運動 | 田淵直樹 (天竜川漁協アドバイザー) |
| (14:50 ~ 15:00) | 休憩 | |
| (15:00 ~ 15:30) | 一自治体に取り組む円滑な雨水利用の普及・促進に向けての考察 | 平井拓也 (地域社会研究所) |
| (15:30 ~ 16:00) | 地方自治体におけるISO9001とISO14001の環境コミュニケーション比較 - 認証取得の背景と効果の分析 - | 松尾 瞳美 (アマタ株式会社) |
| (16:00 ~ 16:30) | 総合討論 | |
| (16:30) | 閉会 | |
| (17:00 ~ 19:00) | 懇親会 | |

2003年度研究大会 講演・発表要旨

記念講演

『革新的スカイウォータープロジェクト』

村瀬 誠 (国際雨水資源化学会)

21世紀における持続可能な社会の実現の鍵は雨水にある。講演では、直面する世界の水危機の重要な処方箋である雨水利用について、「雨の意識革命」、「雨の文化革命」、「雨の技術革命」という雨の三つの点からアプローチし、その現状と課題について述べる。

基調講演

『まがりかどにきた水資源開発

- 「近い水」対「遠い水」 - 』

森滝健一郎 (岡山大学名誉教授)

水問題は、内外共に21世紀の課題である。「水の社会科学」という視点から水問題を捉え、農村や都市は、「近い水」を得ようとして対立・調整を繰り返してきた。また、高度経済成長期の水資源開発は、伝統的水利秩序を「温存」する形で、ダム建設を中心に

進められた。この結果、ダムの過剰建設が顕在化しつつも、いまだ水資源の過剰開発から、脱却しえない矛盾を抱えている。水資源の過剰開発は、水利用者にとって、「近い水」を荒廃させ、「遠い水」への依存をさらに強めることとなるが、そのことが渇水時に、「遠い水」は「近い水」よりも大きな影響を受けるなど、新たな諸問題を発生することになり、水資源開発そのものがまがりかどにきている。

研究発表

『秋田県玉川における水利と土地利用の展開』

横山 俊一 (立正大学・研究生)

近年のヨーロッパ諸国や北米の酸性降下物により酸性化した湖沼や河川とは異なり、日本には火山起源の硫酸や塩酸を含んだ湧水等によって酸性化された河川が東日本を中心にみられる。このため陸水環境の酸性化が世界的に顕著になる以前から、日本では各地の酸性水質の河川を酸性河川と認識し、



その河川水を利用するため様々な対策がおこなわれている。そのため近年各地の酸性河川において恒久的な酸性水対策事業が行われるようになり、水利用の多様化だけでなく、本来酸性水質が通常であった酸性河川の河川環境も変化し、新たな河川環境も形成されつつある。

そこで本研究は秋田県雄物川水系玉川を事例とし、酸性水対策との関連から水利と土地利用の展開および流域の水環境の考察をおこなった。水利用は、各年代において様々な酸性水対策がおこなわれることで一時的には変化がみられたが、恒久的な酸性水対策がおこなわれるまでは、利用種類および量的な面共に大きな変化はみられなかった。しかし土地利用については新規開田等により大きく変化した。これらの水利用等の開発により水環境は大きく変化し、新たな課題も発生している。

「遠州の水環境と市民運動」

田淵直樹（天竜川漁協アドバイザー）

遠州には天竜川の堆砂問題と国交省のダム再編事業等や大井川の河原砂漠、浜名湖、日本一汚濁された佐鳴湖、中田島砂丘の脆弱化、遠州・静岡海岸等の海岸侵食と海亀の保護など緊急の課題がある。つまり河川や湖沼、海などでの環境・生態系の問題が殆ど全て揃っていると言えよう。

これらに対する遠州市民の取り組みは、サンクチュアリ・ジャパンによる海亀の保護や天竜川流域における産廃の調査、天竜川漁協による河川環境調査や啓発への取り組み、浜松環境ネット・ワークによる安間川共同事業で行政の協働作業等、全国レベルにおいても貴重な業績が存在する。そして今国交省が天竜川流域委員会を設立し、浜松環境ネット・ワークと天竜川漁協から1人ずつの委員参加に成功した。従来の公共事業は政官業だけで行い、市民への情報隠蔽と排除が為されてきた。しかしこれを機会に情報公開と市民参加を勝ち取り、市民主体の地域づくりに発展させるべきである。

「一自治体を取り組む円滑な雨水利用の普及・促進に向けての考察」

平井拓也（地域社会研究所）

平成14年10月から同15年3月にかけて、「木津町雨水利用検討調査」に関する検討会が3回にわたって行われた。下水道課及びコンサルタントを事務

局に据え、府及び町役場の関係各課・学研都市立地企業との意見交換という形で行われた。

事業の普及・促進には、行政・市民・企業の良好なパートナーシップが必須であることは勿論であるが、庁内が一体となった連携が前提条件として求められる。

しかし、全体的な協力の見込みは必ずしも芳しくなく、昨年にニーズの把握を目的として実施した住民アンケートと併せても多くの課題が残された。

具体的には、日常的に使用するための定量的な確保・投資したコストに見合う効果への疑問が挙げられ、また、他の自治体の模倣による強引な事業化ではないかという意見が挙がった。

今回は、事業実施までの報告に加え、自治体を取り組む雨水利用のあり方について、目的や意義付けの整理を行い、円滑な事業推進に向けての検討策を提案する。

地方自治体におけるISO9001とISO14001の環境コミュニケーション比較

- 認証取得の背景と効果の分析 -

松尾 瞳美（アマタ株式会社）

本報告ではISO9000s およびISO14001を認証取得した自治体を対象に住民にとっての取得効果を調査し、住民と自治体とのコミュニケーションにおける有効活用の可能性の分析を行う。

ISO9001を認証取得している自治体では、自治体内の全ての住民とのコミュニケーションを対象としており、さらにISO9001の2000年版を認証取得した全自治体において住民全体に対する住民満足度調査が実施されており、積極的に住民とのコミュニケーションがはかられていた。

ISO14001を認証取得している自治体は、その後住民とのコミュニケーションをこのシステムにのっとして処理したことがない自治体が多い。ISO9001が住民全体を対象にしていたのに対し、ISO14001では行政参加に積極的な一部住民との有効な環境コミュニケーションが実現できたケースがあった。

よって、住民が積極的に行政に働きかけるような自治体であればISO14001の方が有効に機能するが、そうではない自治体の場合、また行政区域内の人口が非常に多い場合には、ISO9000sの方がより有効に機能するという分析結果を得た。

2003年度夏季現地研究会
中国視察のご案内

夏季研究会は、水資源環境学会の設立20年を記念して、経済発展の著しい中国沿海部の水資源と水環境をめぐる諸問題についての現地視察と浙江大学との研究交流を計画しています。大都市上海の水処理の実情、浦東経済特区、杭州の湖沼環境などの現地視察を通じて経済発展と環境とのかかわりについて中国の実態を確かめる予定です。短期間ですが、実りの多い夏季研究会になると思います。皆さまの積極的なご参加を期待します。

【スケジュール】

2003年8月3日(日) - 9日(土)

- 3日(日) 関西国際空港 上海浦東空港
4日(月) 上海市環境保護局表敬訪問、水処理施設や市政、浦東経済特区、日系企業視察
5日(火) 上海交通大学と交流 国際シンポジウム「都市環境と水問題」開催
6日(水) 午前 上海 杭州移動、午後杭州西湖参観
7日(木) 午前 浙江大学交流会、午後 市内環境施設、経済開発区視察
夜 移動(杭州市・紹興市)
8日(金) 紹興河川、市街地見学、夜 移動(紹興 - 上海)
9日(土) 上海浦東空港・関西国際空港

【費用】 25万円程度(予定)

【参加予定者】 水資源・環境学会 15名程度の参加枠を予定
立命館大学政策科学部研究入門フォーラム班
教員2名(周教授)、学生26名

【申込み方法】

下記【問い合わせ先】まで申し込んで下さい。ご質問等もこちらまでお願い致します。なお、旅行手続きについては、株式会社西日本ツーリストが代行しますので、下記旅行社で必要な手続きをお願い致します。

【問い合わせ先】 水資源環境学会事務局
企画担当 立命館アジア太平洋大学 仲上健一
E-mail:nakagami@apu.ac.jp

【旅行社】 株式会社西日本ツーリスト(TEL:0771-62-0647 FAX:0771-62-2825)
担当:野中一秀

2002年度水資源・環境学会冬季研究会 『国際的な水問題・地域的な水問題』（2003年3月1日～2日）報告

伊藤達也（金城学院大学）

1. 研究会と見学会

2002年度の冬季研究会は、ここ数年、見学会中心だった内容にひと区切りをつけ、特定のテーマに関して講師をお願いし、参加者全員で徹底した議論を行うというスタイルを採用しました。その結果、冬季研究会としては珍しく、二日間のスケジュールをたて、初日は夜遅くまでのディスカッション、二日目は現地見学会という二本立ての企画を採用させていただきました。講師並びにテーマへの関心の深さからか、幸いにも初日19名（宿泊14名）、二日目11名の参加者を得ることができ、研究・企画委員会としましては、大きな成果を得ることができたと思います。内容も以下に記す通り、現実の問題と直接関係するものであり、参加者の方々はきっと様々な点で得ることの多かった研究会になったと確信しています。

2. 初日の概要

初日は午後から、富士大学の松岡勝実氏に「国際水資源法の諸側面」と題する講演・レクチャーを、三輪信哉先生（大阪学院大学）からコメントをいただきました。夕方からは懇親会を兼ねてのフリーディスカッションでしたが、これについては何らかの統一したテーマを設定していたわけではなく、懇親会の開始から就寝に至るまで、懇親会の席で、浴場の中で、そして個別の部屋で交わされた議論は、様々なテーマに及び、水資源・環境学会の最も得意とする時間消費スタイルとなったのではないのでしょうか。

3. 講演と討論

松岡氏の講演は、「はじめに、世界の水問題、国際社会の取り組み、法の機能、国際水法の特徴、法源、基本原理、生成中の諸原理、水の衡平利用、事例研究、水資源の国際取引と環境保護、おわりに」を内容とし、国際水法に関わる様々な問題を、1時間30分という短い時間の中でコンパクトにかつわかりやすくお話していただきました。翌日朝にはジュネーブに向けて発つという大変あわただしい日程の中で充実した講演をしていただいた松岡氏に、この場を借りて感謝いたします。また、コメントーターの三輪先生からは適切なコメント並びにその後の討論に繋がる数々の指摘をいただくことができました。講演並びにコメントの内容が大変充実しており、それをここで改めてまとめて紹介することは、筆者の能力を超えるのが実際です。従いまして、講演やその後の討論の中で個人的に印象に残った点

に絞って、簡単に記させていただくことにします。ただ、その内容も実は三輪先生のコメントをなぞった形のものとなっていることをご理解いただければと思います。

(1) 国際的な水問題の深刻化

20世紀末から現在にかけて、わが国では長良川河口堰、諫早干拓、千歳川放水路、吉野川可動堰、細川内ダム、川辺川ダム問題と、立て続けにダム・河口堰をめぐる水資源問題が全国レベルの大きな社会問題になってきました。そして、千歳川放水路、吉野川可動堰、細川内ダム計画は休止・中止され、琵琶湖・淀川水系のように、流域レベルで今後、ダム・河口堰による水資源開発を行わないという、水資源開発に関わる大きな政策転換も見られるようになりまし。もちろん、国内を見渡せば、計画が破綻したのにもかかわらず、事業が進められている計画がたくさんあることはご承知の通りです。しかし、理由が何であれ、わが国において水資源開発事業が大きな転機に差しかかり、従来型の開発が生き残ることが大変困難になっていることは明らかでしょう。

しかし、いったん、海外に目を転じますと、途上国を中心にダム等を中心とした水資源開発計画はますますスピードを上げてつき進められているのが実際です。さらに、引き続き急激な人口増加、より慎重さを要する生態系システムの中での開発、一本の河川等をめぐって複数の国々の利害が錯綜する複雑な国際関係等、国内の水資源問題とは明らかに異なる要素を持つ水資源問題が存在します。近年、立て続けに出版されている国際的な水問題に関する刊行物（マルク・ド・ヴィリエ(2002)、ジェフリー・ロスフェダー(2002)、高橋裕(2003)、高橋裕編著(2003)等)は、こうした国際的な水問題の深刻さを強く印象付け、早急の問題解決を訴えていると言えます。そして、こうした問題に直面して、水資源・水環境を専門領域とする研究者として、やはり、自らの専門の方向性を、これらの問題をも包摂したものへと再編成していく必要性を感じざるを得ません。松岡氏の講演内容の前提には、こうした国際的な水問題の深刻さが横たわっており、それを法的側面からどのように整理し、解決へと導いていくか、という問題意識に結び付けられたものでした。



(2) ハード・ローとソフト・ロー

松岡氏の講演の中で最も印象に残ったものが「ハード・ローとソフト・ロー」についてです。わが国で水資源問題を考えていく場合、「古田優先」「上流優位」原則が貫徹しており、その適切性を別にすれば、長い歴史の中で水をめぐる地域的対抗関係は比較的良好に整理・整備されてきたと思われまゝ。高度成長期以降、河川下流部に位置する都市用水の河川進出に伴い、これら諸原則は一定の修正を迫られていきますが、河川水利秩序を根本から変革するには至っていないというのが筆者の印象です。だからこそ現在も、こうした既存原則の修正、特に「水の有効利用」、「水の効率的利用」の点からの修正要求、環境保全的側面からの要求が提出され続けているのでしょう。

国境を越える水資源利用を考えた場合、上・下流間の地域的対抗関係、開発の新旧をめぐる対抗関係等は、わが国で培われてきた河川水利秩序の適用によって何らかの解決を導き出す場面もあり得るかもしれませんが、一方で、国際的な水争いには、そうした次元を超えたレベルの厳しい対抗関係（21世紀において、水をめぐって戦争が起こると言われる由縁の）が存在しているのも事実です。そして、そのレベルの対立を緩和させることのできる法体系が現時点において必ずしも整備されているわけではない、という松岡氏の指摘は、法律というものが様々な現実問題を過去の判例蓄積の中で、その解決を図るものであるという筆者の理解において、大変衝撃的なものでした。国際水法には、よって立つところの原典（ハード・ロー）がまだ十分に整備されておらず、現実の対立と調整過程の中から、また様々な国際会議の中での調整結果として現れる諸条約、諸宣言（ソフト・ロー）の積み重ねの中から、今後の展望を切り開いていかざるを得ないという、松岡氏の講演を聞き、水資源・水環境に関わって研究を行う者の使命は、現実に発生している問題の中から、より適切と思われるソフト・ローをいかに数多く生み出していくかにあると考えた筆者の思考回路は果して適切なものか。多くの方に聞いてみたいところです。

(3) 湿潤地域の水問題、乾燥地域の水問題

筆者の印象をもう一点書き記すとすれば、国際的な水問題解決に向けての方向性の中に、わが国における経験をどのように生かすことができるか、また、国際的な水問題解決に向けての議論を、わが国の水問題の解決に向けてどのように取り込むことができるか、という点に関わるものです。実はこれも三輪先生のコメントの中に既に含まれており、それを聞きながら思ったことなのですが、筆者の考えを整理すると、以下の二点になります。

まず、わが国の水問題を含め、世界の水問題を考える場合、政治・経済・社会・文化という人文・社会的側面の相違以上に、降水量や蒸発散量、さらには河川流量といった自然的側面を前提とした議論を組み立てていくことの重要性です。日本やUSA東部、ヨーロッパ地域のような温暖湿潤気候下にある地域の場合、水利用面において何らかの致命的な失敗（大規模な水移転、広域的な水汚染等）をしない限り、ダム・河口堰開発に伴う環境影響問題等は発生するかもしれませんが、少なくとも人命に関わるレベルの水不足問題の発生は考えられません。そうした地域の水問題と、水収支上、消費的水利用が著しく制限される乾燥地域の水問題を同一の前提から議論することは大きな誤解を招きかねないのではないのでしょうか。世界の水問題（水不足）深刻地域としてよく引き合いに出されるナイル川流域やイスラエル、チグリス・ユーフラテス川流域等の中近東、黄河流域、アラブ海地域、カリフォルニア州南部地域は、いずれも水収支上、降水が地上に残りにくい乾燥地域であり、元々水利用において、消費的水利用が厳しく制限されざるを得ない条件下にあります。こうした地域の水問題解決には、第一に消費的水利用の抑制が求められなければならないのであって、巨大ダム等による水資源開発が適切な手段になるとは考えられません。従って、わが国でかつて経験した水争いやその調整手段・手続き等は国際的な水問題の解決に当たって参考になるところはあるのですが、自然環境の条件があまりにも異なるため、安易な適用には注意を要すると考えられます。

(4) 国際問題としての水争いの解決法？

次に考えたことは、現実に水争いが国際問題に発展しつつある乾燥地域において、人口増加や、農業振興、工業発展等のために、地域的制約（許容量）を超えた消費的水利用が発生した場合、その解決策には、改めて消費的水利用を地域的制約（許容量）の中に抑える、他地域から水を持って来る、くらいしか解決策を思いつくことができなかつたことです。恐らく、この場面で、まさしく「水の効率的利用」といった、水を経済財として捉えていく有効性が現れてくるのでしょう。ボトルウォーターは既に立派に商品化されていますが、大規模な水移転（パイプラインや、船によるウォーターパック輸送等）に関わる議論が今後ますます注目を浴びてくると思われまゝ。

水の経済財化については、わが国においても、国土交通省が水を「公水」扱いから全く抜け出させることができず、「水の有効利用」「水の効率的利用」をめぐって問題を発生させていることと大いなる

類似性が存在します。従って、ここではわが国の問題と国際的な問題がクロスしながら存在しています。水を経済財として取り扱うことに関しては、「水のシビルミニマム」や「水利用に伴う環境コスト」に関する問題を乗り越える必要があるものの、一定の合意とともにその向かうべき方向性が指し示される時期に来ているのでは、と思った次第です。実はこの議論に関しては既に松岡氏が昨年の研究大会で発表し、その成果をまとめられていますので、一読をお勧めします（松岡(2002)）。

4. 二日目の現地見学会

二日目は初日の会場・宿泊地となった湖東・湖北地域の水環境に関わる見学会を実施しました。目的地は早崎内湖と水鳥公園です。途中、かつて水資源・環境学会が計画に関わった長浜新川に立ち寄り、秋山会員をはじめ、計画に携わった会員から、当時の計画概要と現状の課題についての説明を聞きました。その後、早崎内湖に向いました。

(1) 早崎内湖とピオトープネットワーク調査

早崎内湖は滋賀県びわ町・湖北町に位置し、かつては琵琶湖とつながり、水が流れ込む内湖でした。戦後の食糧増産の必要性から干拓されたのですが、すぐに減反政策が始まる等、農業政策としての行き詰まりを見せ、その後、ゴルフ場を核としたリゾート施設の誘致も図られましたが、1999年、地権者の同意が得られず、計画が中止される等、その使い道に混乱の続く地域でした。

2001年、滋賀県が早崎干拓地内約17haを通年にわたって湛水し、生態系機能、水質浄化機能等の調査「早崎内湖ピオトープネットワーク調査」を開始し（2001年11月～）、一部では「内湖復活」と報道される等、琵琶湖の生態系回復に関わるプロジェクトとして注目を集めるようになり、今回の見学となりました。私はほとんど基礎知識のないまま、現地に行きましたが、田んぼの畦道に行く車の中から見える一面の水面風景に対して、正直に言えば、必ずしも画期的なプロジェクトという印象を持つことはできませんでした。ただ、その後、当日配布された資料を見る中で、調査開始から1年以上が経過し、陸生植物・水生植物、水生動物の生育範囲の拡大、鳥類の飛来数の増加が確認される等、着実にその成果の上がっていることを知りました。しかし、この調査区域の流入・流出水量はわずかで、かつての内湖のような水の出入りを再現するには至っておらず、水質浄化の効果についての判断が困難であること、そもそも、湛水された水は早崎干拓田の承水路、排水路からのもので、琵琶湖の水は入っておらず、その点で内湖ではないこと、現在、湛水田は農家から借り上げているが、ま

だ将来的な方向性が確定していないこと等、まだまだ「内湖復活」と呼ぶには多くの課題を抱えていることも同時に知った次第です。

(2) 水鳥センターの見学

次に向かったのは「湖北野鳥センター」（1988年開設、滋賀県）、「琵琶湖水鳥・湿地センター」（1997年開設、環境庁）です。「湖北野鳥センター」の2階が観察コーナーになっており、琵琶湖岸の水鳥を、フィールドスコープを使って間近に見ることができます。実際、一度スコープを覗くと次々に水鳥を発見することができ、ずっと見ても飽きない状況でした。ただ、当日は風が強く、水鳥も無理をせず、湖岸に群れて浮かんでいる状態で、多くの鳥が飛び立ったり、空中を舞うといったダイナミックな光景を見ることはできませんでした。その代わりというわけではないのですが、「琵琶湖水鳥・湿地センター」2階の展示室に設置された大スクリーンで、琵琶湖の水鳥の生態をセンターの方による解説付きで学ぶことができました。私はどの水鳥を見ても全く区別のつかない人間ですので、解説していただいていたのはじめて水鳥の生態を、ほんの一部ですが、知ることができた状態です。最後に野田沼緑地（公園）へちょっと寄り道をし、記念写真らしきものを撮り、長浜へ戻って、昼食後解散となった次第です。全部を含めて4時間弱のショートトリップでしたが、改めて考えると、琵琶湖をめぐる様々な環境復元事業や生態系の実態に触れることができ、なかなか中身の濃いプログラムでした（この原稿を書かせていただいていたことが多いのですが）。

参考文献

- ジェフリー・ロスフェダー(2002)『水をめぐる危険な話』河出書房新社
高橋裕(2003)『地球の水が危ない』岩波新書
高橋裕編著(2003)『地球の水危機』山海堂
松岡勝実(2002)「水の国際取引と環境保護」
『環境技術』31-12
マルク・ド・ヴィリエ(2002)
『ウォーター 世界水戦争』共同通信社

第3回世界水フォーラム協賛シンポジウム
「コミュニティから健全な水循環をデザインする」開催報告
 仁連 孝昭（滋賀県立大学）

NPOエコ村ネットワークと共催で第3回世界水フォーラムのプレ企画として上記シンポジウムを2003年1月31日に滋賀県大津市のピアザ淡海を会場に開催しました。当日120名ほどの参加者があり、活発な議論を展開しました。なお、このシンポジウムに参加した学会、エコ村ネットワークおよび報告した企業とNPOのこのテーマに関するブース展示を世界水フォーラム開催に合わせて行われた「びわこ水フェア」の会場（滋賀県立体育館）で3月19日から21日までの期間に実施しました。

.....

これまでの都合の悪い水を都市から排除し、都合の良い水を引き込むという地域の水循環を否定するこれまでの水管理の結果、ヒートアイランド現象、地域の生態系の破壊、降雨時の洪水ピークの上昇、ローカルな水源の喪失などの問題を引き起こしてきている。そこで、地域の水循環を取り戻すために、私たちの生活しているコミュニティからどのように地域水循環を回復することができるかについて、シンポジウムで議論を深めた。

シンポジウムは地域での水循環に取り組むNPOや企業の報告を受けて、専門家がコメントをし、参加者全体で議論をするという形式で進められた。

報告1 日本バイオテクノ（株）太田越秋鳳

現在一般的な下水道、合併浄化槽では、し尿と雑排水を併せて処理することになっているが、浄化という視点からすると、性質の異なる汚水を分離して処理するほうが優れている。し尿と雑排水を分離して処理するシステム、またし尿についても糞と尿を分離する便器に取り組んでいる。

報告2 （株）環境技術研究所 新井剛典

し尿処理のシステムとして一般的な生物分解槽に

よる処理だけでなく、さらに土壌浄化を組み合わせることにより、よりクリーンな処理が可能となり、処理水の再利用が実現でき、循環利用の可能性をひろげることができる。

報告3 NPO法人雨水流出抑制技術協会 宮沢博

雨水貯留槽を各戸に設けることにより、雨水流出を削減することができるだけでなく貯留した雨水をトイレ等に再利用することができる。また、流出抑制のために路面排水を浸透させる浸透枳の設置も効果的である。

コメント1 菅原正孝（大阪産業大学・学会会長）

「自然の浄化能力を生かす仕組みを取り入れる方向に世界の水処理が動いてきている。」

コメント2 國松孝男（滋賀県立大学）

「下水管に入った水は処理されても地域に戻らないことが問題であり、地域の水循環をつくるシステムが課題。そのとき一般に受け入れられるコストが重要になる。」

コメント3 中村正久（琵琶湖研究所長）

「水循環にかかわる仕事は公共のものとされてきたがこれからは民間が大きな役割を果たすことになる。」

まとめ 仁連孝昭（滋賀県立大学・エコ村ネットワーク）

「地域から水循環のしくみづくりに主体・方法とも新しい視点から取り組んで行こう。エコ村はそのひとつの試みである。」

